

的な価値を産み出したのである。

法然上人の念仏義と門下の論点

森 野 現 弘

日本に於て浄土教が仏教全体の中に独立的に主張されて来たのは、法然上人の時代即ち鎌倉時代頃である。法然以前の浄土教としては、その源は古く中国の曇鸞、道綽、善導等の師によつて開かれ、かような中国浄土教を背景基盤として日本浄土教の姿が現れたのである。結局、この当時の浄土教と云えば、日本仏教の初期に当り真言、天台の時代、云はば南都北嶺の浄土教と云うことになる。そして我国でも仏教美術が次第に発達して、寺院の建立が盛んになり、日本浄土教の発展の原因となつたのである。そしてここに法然なる僧が現れ日本浄土教の地位を確立せしめ、念仏を申すことによつて、彌陀の浄土に往生することを説き、仏願に順ずる才十八願所誓の称名念

仏の一行を立てられたのである。

このように法然は念仏をもつて一宗の形式を作つた。これ即ち浄土宗の起源である。然し、法然は念仏を広めるに当つても全く他の經文を否定されなかつたのであつて、念仏は單なる日課として毎日数万遍の称名念仏の行を修したから、源空に対して帰依した人々は一般民衆ばかりでなく皇靈や朝廷から盜賊や遊女に至るまですこぶ多く、特に兼実の爲には法然は「選択本願念仏集」を選述して浄土宗念仏の教の大綱を示した。そこで問題となるのは法然は念仏と他の經文との關係についてどの様に見られてゐるか云う事であるが、念仏と非常に密接な關係をもつものは円戒で、選択集によれば、布施持戒はこれ雜行として選擇すべきことを説いている。即ち「今選擇前布施持乃至孝養父母等諸行而選擇專称仏号。——(中略)——然則彌陀如来法藏比丘之昔被催平等慈悲為晉攝於一切不以造像起塔等諸行為往生本願唯以称名念仏一行為其本願也。」と記されており、當時は造像起塔や持戒持律が尊敬され、智慧高才や多聞多見を求める為に出家する人達

が多かつたのであるが、法然上人は貧窮困乏の者や、愚鈍下智の者、少聞少見の者、破戒無戒の者、これらすべての人が救われる道は念仏の一行であると説いて居るのである。又法然は聖道、浄土の二門を仏教の二大潮流と認めつつ、しかも機教相応の論理を以て捨聖帰浄をすすめられたので、末法の我々には浄土一門の救いがあるのみだという所に教化の重点をおかれたのである。このように法然一代の長い求道生活の間に、天台、真言などいわゆる南都諸宗に学び、深く聖道の難証を体感して、浄土の易行に帰され、ここに浄土宗の独立が志ざされたのである。こうして法然が念仏一行往生主義を主張するにしたがつて、他の仏教界よりの迫害は次第にきびしくなり、法然や彼の門下諸師たちは流罪に処せられた。しかしこのような一般仏教界よりの反響の中に、法然門下教学は進歩をつづけ、幸西たちは法然在世中より他力救済を理由に一念義なる邪念義を主張し法然門下からはも

んされている事実もある。多くの門下の中特に有名な諸師は次に上げる五師である。即ち

幸西の一念義、隆寛の多念義、証空の西山義、鎮西の常

念義、長西の諸行本願義などである。以上が法然滅后約半世紀頃を過ぎると、それぞれ各派を広めはじめた。ここに於ては、彼らの念仏に対する論点を考察して、法然上人との關係をのべたいのである。

先ず最初にのべることは一念多念の問題でこれは云うまでもなく幸西の一念義と隆寛の多念義が対立すること、幸西は学問をした上で「南無阿彌陀仏」と一念するだけで往生することが出来て、後の二念以上は何ら意味のないものである。と説いたのに対して隆寛は学問なくしてもただ一心に彌陀を念じ毎日数千遍の念仏を申すことによつて往生出来ると云う多念を主張されているのである。更にその後聖光房も安貞二年（一二二八）頃より以降、肥後の往生院等にあつて「末代念仏授手印」等を著し、法然滅後の異義蘭菊を慨歎しつつ、一念義系統や他力高調派に反対して多念専修を主張し、当時中央にあつたと思われる源智の「選択要決」と相呼応して、以て当時京洛に於て専ら勢力のあつた他力高調派西山派祖証空の行、観、弘三門説、正因正行、顕行示観説等に対して、如き、法然滅后二十年頃の状況を窺い得るであ

ろう。そこには法然を伝統するに当つての実践派理論派、進歩保守、新旧兩派の意見の対立が見出される。

その他、天台の住心や長西の如き法然の教を受けたもの、又はその滅後の帰浄者、法相の良遍や東大寺の悟阿等により、主として法然滅后三十年以後のころ、諸行本願義が主張されている時、かの正元元年（一二五九）に著された日蓮の「守護国家論」に於て、選択集を痛烈に破しつつ、法然の門弟で内心は専修念仏でありながら外面のみ諸行往生説を立て聖道門に妥協するように見せかけている者もあり、これ又当時の浄土教界の状況を観察することが出来る。かように法然門下一般を通じて見られる状況は、前述した法然の主張、それに関連して引起されてきた外部的な論難などが顧みられ、更に他力念仏創唱後まもなくと云うことや、教団的拘束力の少い自由教団であつたことや、法然門下各自が天台や真言などを経て帰浄するとか、その経歴を種々にしていたなどのことからの輻湊等が詳細に注目されるならば、その成立の必然性を容易に理解せしめられ得ると思う。かようにして、法然門下は内外諸方面より全体的に、法然の浄

土一宗念仏一行主義確立の為に、念仏諸行問題等を中心に、或は仏教の根本義に顧み、或は浄土正依の三經、或は善導等により、法然の指示を仰ぎつつ各自の浄土教体系を再構成再確立すべく要求せられていたのである。

鎮西上人の嗣法の意義

一

山崎 益身

鎮西上人は、我が浄土宗法然上人の後を受け継いだ浄土宗の才二祖であるにもかかわらず真宗源流史論（中沢見明氏）の中によれば、二祖と云う歴史的な根拠がないと主張している。特に七条起請文に署名がない、又、選択集の附屬の史実が曖昧であり、末代念仏授手印の手次状の史実は無根の虚説であり、従つて師弟關係について尚確実な史料に欠けている。更に年回追善に説経札讀の記事を載せているのは、恐らく未流の将来の經濟問題を